

連載

新・種を蔭く人

〈私説〉世紀の大プロジェクト ～豊川用水～

高崎 哲郎 (作家)

第13回「打ち続く干ばつ、豊川総合用水事業、 そして大島・^{したら}設楽両ダム始動」

「設楽ダムの試練と夜明け」

設楽ダムは、洪水調節、流水の正常な機能の維持、灌漑用水・水道用水・工業用水の供給を目的とする多目的ダムである。平成2年2月、豊川水系が水資源開発促進法に基づく水資源開発水系に指定され、同年5月には設楽ダムの建設を盛り込んだ「豊川水系における水資源開発基本計画」が閣議決定された。国や愛知県は設楽町に対して同ダム実施計画調査に関する現地立ち入り調査を申し入れた。町側は受け入れ条件として、①ダム基金の創設、②道路網の整備、③下流4市7町による交流施設建設など6項目を打ち出した。国と県がこの6項目を基本的に受諾する意思を表明したことから、同4年10月に国(建設省中部地方建設局(現国土交通省中部地方整備局))と設楽町の間で「設楽ダム実施計画調査に係る現地立ち入り調査に関する協定書」の調印が行われた。

平成8年7月、建設省設楽ダム調査事務所は、ダムの規模を大幅に拡大する新ダム案を設楽町に提示した。堰堤の高さを120メートルから130メートルとし、総貯水容量を8000万立方メートルから1億立方メートルとするロックフィルダムから重力式コンクリートダムへと計画変更を行ったものである。計画変更により、水没戸数は80戸程度とされていたものが、さらに30戸ほど増える見通しとなった。町議会や地元住民が反

発し、水没予定地での現地立ち入り調査ができない状態となった。曲折を経て、8000万立方メートルの従来の計画で、現地調査が行われることになった。水没者の移転地構想が地元側に示された。その過程で、過疎化・高齢化の進む水没地区住民から早期解決を望む声が高まった。平成10年(1998)9月、設楽町長後藤米治が棚上げを解除して1億立方メートル規模での詳細調査を容認する方針を表明した。ダムの本体工事を待つばかりである。

＜参考；豊川総合用水事業の経過＞

1、全体事業の着工時、竣工時

豊川総合用水事業(全体)

昭和55年10月～平成14年3月

2、主な工事の着工時、竣工時

万場調整池	昭和57年～平成6年1月
大原調整池	昭和61年12月～平成7年1月
芦ヶ池調整池	昭和62年2月～平成7年3月
蒲郡調整池	平成元年12月～平成8年10月
寒狭川導水路	昭和62年1月～平成3年3月
寒狭川頭首工	平成3年11月～平成9年3月
大島ダム	平成3年11月～平成13年10月



「田原市、農業産出額全国1位!」



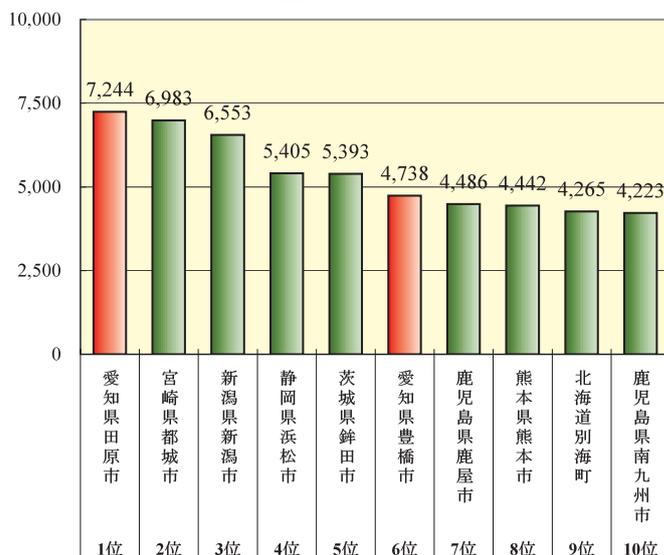
ハウスで埋め尽くされた農園（現在、田原市赤羽根）

東三河地域は温暖な気候であり、安定した水の供給があれば、土地生産性の高い農業が展開できる。豊橋市の平成2年度(1990)における農業粗生産額は598億円にのぼり、全国市町村では飛びぬけて第1位である。日本を代表する「農業王国」となった。2位別海町(北海道)、363億円。3位都城市(宮崎県)、355億円。4位渥美町(現田原市)、324億円。5位浜松市(静岡県)、321億円・・・平成2年度における農業規模をみると、豊橋市内の農家1戸当たりの経営耕地面積は95アールであり、愛知県平均の65アールと比べるとかなり高い数値を示している。階層分布をみると、2ヘクタール以上の大規模農家が増えている。経営規模の拡大は、国際競争力をつけるために避けて通れない道である。

20年後の平成22年度(2010)の農業粗生産額(農業産出額と名称変更)を見てみる。

第1位田原町(愛知県)、724億円(20年前の2倍強)。2位都城市、693億円。3位新潟市、655億円。4位銚田市(茨城県)、539億円。6位豊橋市、473億円・・・渥美半島の田原市が全国1位、豊橋市がやや落ちたものの第6位。いずれも豊川用水の恩恵なくして、この実績はありえない。田原市が不動の第1位を当面維持し続けるだろう。

平成22年 農業産出額(統計)(千万円)



(農林水産省ホームページより作成)

<付録1>

文学者杉浦明平^{みんべい}；同時代人の視点

杉浦明平(1913 - 2001)は、渥美半島が生んだ偉大な現代文学者(小説家、評論家)である。私は学生時代から彼の作品を愛読した。骨太なヒューマニズムと風刺の精神を学んだ。彼は大正2年愛知県渥美郡福江町大字古田(現田原市古田町)の小地主の家に生まれた。以下、『わたしの崋山』(杉浦明平、生前の平成3年(1991)刊)の復刻版「解説」から引用する。「彼は県立豊橋中学(旧制、以下同じ)の4年修了で一高に入り、東大国文科の大学院にまで進んだ秀才であった。一高時代から歌人土屋文明に師事、『アララギ』に属し、歌作と短歌論にはげむ一方で、詩人立原道造、文学者寺田透、文学者猪野謙二らと同人誌『未成年』を発刊し、創作を発表している。大学卒業後は、河上肇の著作をとおしてマルクス主義に近づき、同時に原典によるルネッサンス研究を志し、戦時下(1943)に周到にして大部のレオナルド・ダ・ヴィンチ『科学について』を刊行している。(翻訳『レオナルド・ダ・ヴィンチの手記』もある)。知識人なのである。

第13回 「打ち続く干ばつ、豊川総合用水事業、そして大島・^{したら}設楽両ダム始動」



作家
杉浦明平(杉浦家蔵)



杉浦酒店「佐平佐」(杉浦明平実家、田原市折立町)

敗戦の年の5月に郷里に戻り、半世紀近い今日までここに腰をすえている。朝鮮戦争を機としたいいわゆる逆コースの嵐のなかで、昭和24年(1949)1月、日本共産党に入り、徒手空拳、地元のボス連と相渉り、さらに教育委員、町会議員(2期)に推され、農村の民主化に努めた。同36年(1961)、作家安倍公房、同野間宏、評論家花田清輝らと党内民主主義を求める共同声明を出した。33歳から49歳までの壮年期のほとんどを賭けてきた党との決別は、杉浦の文学と実存にとって深刻な危機であった。党员文学者のなかには、党から離れたのを良い潮時にして民衆から離れる人もいた。こんな小器用さには無縁であり、戦前・戦中の知識人の狂態を凝視しつつ、ルネッサンス研究とあいまって、<民衆とともにある>ことを信条としてきた杉浦にとって、徹底的な自己の再検討が必要であった」

彼は昭和19年に帰郷し町議2期を務めた。歴史小説『小説渡辺華山』で毎日出版文化賞を受賞した。地元渥美半島の記録文学やルポルタージュ(『台風十三号始末記』、『ノリソダ騒動記』、『逃げた町長』など)を数多く手掛けた。(杉浦明平氏・長女岩田ミナ様には多大なご協力をいただいた。心から感謝したい)。



<農業王国の悲喜劇>

私はここで「杉浦文学論」を展開しようとは思わない。人生の後半を郷里で送った優れた文学者が、豊川用水の通水によって変貌する農民たちの姿をどうとらえたか、その鋭い視点を確認したいのである。(引用文は原文のまま)。

『渥美だより』(昭和49年(1974年)刊)より引用する。

「豊川用水と渥美の農業」より。

<多かった反対意見>

ずっと前、豊川用水が本格的に着工されようとしていたころ、わが渥美町(渥美半島尖端、現田原市)では、豊川用水に無関心かさなければ反対するものが大部分であるが、しかしもし用水が完成したら、どこよりも金もうけをするのは、渥美の農民ではなからうか、という趣旨のエッセーを書いたことがある。

十年近く前のことであろうが、農民の心配していたのは、工事の分担金のことであった。現金収入が今日ほど多くなく、わたしの調べたかぎりでは、1.5ヘクタールの農家の粗収入が五十万円に達していなかった。ということは、実収入は二十万円そこそこという意味であった。豊川用水の分担金は十アール当りだいたい利子も含めて八万円前後になるだろうと計算されたから、1.5ヘクタールの農家は百二十万円支払わなければならない。とすれば十五年賦としても年々八万円ずつ徴収される。それは借金の返済だけで、その他に水の利用費や維持管理費も負担せざるまい。とすれば二十万円の実収のうちで農家の手もとに残るのは十万円そこそこという計算だった。月一円で五人以上の一軒がやっていけるだろうか。物価は今ほどあがっていなかったとしても、そんな大きな負担では生活ができないから、豊川用水には反対という意見が圧倒的に多かったのである。

もっとも「年賦だから、支払いが終わるころにや、年八万円といっても、たいしたことはなくなる。金の値打ちは下がる一方だからなあ」という意見もあった。心の底では、この意見に同調する気持ちがないではなかったけれど、インフレになるという確実な保証がないからには、当面は高い分担金に反対する気持ちの方が強かったのである。(中略)。

しかし工事が進んで、渥美半島の尖端の方までやってきて、耕地整理や交換分合がはじまるころには、反対論はかなり消えてしまったようである。というより反対が通らず、どうせ金をと



田原市立渥美図書館（杉浦明平寄贈図書コーナー）

られなくてすまんことなら、儲けるだけ儲けなくちゃ損だという考えの方が強くなっていったというべきであろう。

<事業完成で不満解消>

豊川用水の幹線が渥美町に入った年の夏は、雨が少なくて干害が出はじめていた。この地方でも稲田に水がいるのはいうまでもないけれど、八月か九月にかけては、農作物の本命である冬どりかんらん(キャベツ)の種まき、仮移植、本移植が行われて、ほとんど毎日灌水する必要があり、温室用の電照菊のために露地に植えてある古苗にたっぷり水を施せば、古い苗から太く遅い新芽が出て来るから、これを摘んで温室用に挿し木するのである。一棟で六千本からの挿し木用の芽がいるのだが、照りつけては新しい芽が伸びて来ないだろう。

このひでのりの夏に用水の水が使えるようになったから、今までの反対論など即座に消し飛んでしまっただろうに、町の東端部にまで伸びてきただけで、その年の工事は終わった。すぐそばまでやってきて、すでに他の町村では悠々と灌水しているのに、一ところだけ取り残されたわが町の農家がいかに工事関係者を呪ったか、だれも想像できるにちがいない。手の届かぬブドウを酸っぱがった狐のように、水の来なかった農家では「豊川用水などやくにも立たぬものに金をつぎこんだものだ」とそした。

しかしこういう不平不満はすぐ消えた。というのは二、三年使っているうちに、こんなに便利なものはないことがはっきりし

たからである。(中略)。キャベツの苗が育ったら、整備出来た本畑へもって行って植えればいい。植え終えたらスプリンクラーを三台もすえつけて、元栓をひねれば、水がほとぼり出て、スプリンクラーはくるくる回りだす。二時間もかけっぱなしにしておけば、まる一日雨が降ったくらいの水量が畑をうるおす。大根の方は、どうやら自然の雨がいらしいとはいっても、スプリンクラーで水をとばしておけば、発芽するし、照りつけても、熱で燃え尽きてしまうようなことはない。

<倍増した温室の数>

豊川用水がくると、温室は簡易水道から別れて、用水の水に切りかえられた。おかげで村はずれの家々から水道の水が出ないのは温室のせいだと恨まれずにすむようになった。今でもそのあたりの水の出はあまりよくないのだが、もう温室が水を使いすぎると罪を温室にかぶせるわけにはいなくなった。

それから今まで温室のなかった場所にニョキニョキと温室が立ち並びだし、白いコンクリート造りの電柱が山の麓まで続くのが見られるようになった。統計的な数字はもちあわせていないけれども、豊川用水の通水いらいの温室の棟数は倍増したかもしれない。少なくとも地域的にすごく広がったことだけは誰が見てもまちがいない。(中略)。

農家のそのものも、いろんな差異があるだろうが、一年の粗収入の目標五百万円から一千万円に切り上げられるようになり、『一億円といったところで、昔の一億円と違って、たいした値打はないぞね』というものもあらわれる。新築ブームがずっと続いて、乗用車二台にトラックにトラクターを備える農家もある。鉄筋コンクリートの住宅も見え、重油ボイラーによって各室冷暖房完備という家もぼつぼつ出てきた。こういうことには、背伸びや見栄もあるだろうし、すべてが豊川用水だけのおかげとはいえないまでも、用水で水が自由に使用でき、温室が広がり、どの畑でも反当五千キロ以上のキャベツが収穫できるようになったことも、大いにあずかって力あったことにまちがいなかるう。

<東三河全体が競争者に>

(前略)わずか数年にして豊川用水は渥美の農業の内部に完全に定着してしまっただのである。日常生活に電気やテレビや簡易水道があってあたりまえのように、農業生活にとって豊川用水は当然の存在になった。万一、幹線の故障でもあって、スプリンクラーで水が飛ばなくなったときは、停電したり水道の蛇

第13回 「打ち続く干ばつ、豊川総合用水事業、そして大島・^{したら}設楽両ダム始動」

口から水が出なくなったりしたときと同じように、豊川用水がなくてはかなわぬものであることが実感されるにちがいない。もちろん、「なくなって知る親の恩」のように、そういう実感を味わうことはない方がいいのだが。」

(初出『用水と営農』1973年1月号)。



『ボラの^{こうしょう}哄笑』(昭和57年(1982)7月刊)から引用する。

「寺社建築」より。

「この2、3年新築される農家の豪華さには驚かされる。瓦はほとんどこの家も三河瓦の特産地碧南の特注したもので、軒瓦の1枚1枚に家紋を入れたものも少なくない。そして戸袋や破風^{はふ}にトタンを用いない。トタンを張ってある家を見たら、月給取りの新築と思えばまず間違いない。農業者の新築はほとんど^{あかがね}赤銅を使用しているのだから。

新築の農家のもう一つの特徴はじつにいくつも屋根が重なっていることであろう。数年前までは、富裕な農家が新築するさいに必ずといってよいほど、やや円い屋根をもった玄関が張り出していた。それは町の料理屋の玄関そっくりだった。今回の流行も張り出し玄関をそなえている点では、一昔前の流行に似ているとはいうものの、その玄関が堂々としているだけでなく、玄関に屋根^{ひきし}庇は張り出していて、その上に家紋入りの煉瓦で飾られたりっぱな破風造りの屋根が載っている。そのうえ、いく重もの屋根のはしはことごとく反りかえっている。そのせいかその切妻造りの邸は、料亭とはちっとも似ていない。何かに似ているものがあつたなあと思案しているうちに、やっと全体としてお宮に似ており、丸味をもたせた玄関はお寺に似ていると思



広大なキャベツ畑 (豊橋市、山本憲悟氏農園)

当たった。お宮とお寺とを総合統一したとってよいか癒着させたといつてよいか、ともかく寺社建築にほかならない。

わが渥美の農業者たちは、とうとうみずから神仏になったつもりなのであろうか。(中略)。

いま流行中の寺社建築が農業者みずから神仏に擬したい気持ちのあらわれかどうか断言しがたい。が、金がたまつたから、しばしなりとも泥にまみれた自分から離脱したい願望と無関係ではなからう。」

「キャベツ王国の崩壊」より。

「キャベツの相場は二年良くて一年悪い、とくに暖冬はただ同然に下がるが、続く二年間高騰するので、冬どりキャベツはもつとも安定性のある作物となり、渥美の農業は、電照菊、沢庵用ダイコンとともに儲かる農業の見本、いわゆる「日本農政のショウウインド」といわれた。一世帯の車の所有台数日本一、百数十台のフォードトラクター、三、四千万円の豪邸など、みんなキャベツと電照菊のおかげである。」

「モーニング・サービス」より。

「毎日のように(喫茶店の)モーニング・サービスに集まってくる客はだれだろう。町役場や農協の職員は比較的のんびりしているし、共稼ぎも多いから、勤務時間ちゅうでも何か口実をつければ二十分や三十分ひまをつくって、トーストとコーヒーの朝食を摂ることができないではない。が、その人数は限られている。町の小売商店の若い者もいるけれども、その大部分は若い農業者で占められている。(中略)。午前九時か十時に喫茶店が開く頃になると、農作業を中絶、車に乗って二人で喫茶店に出かけて、モーニング・サービスのトーストとその他で朝食をとる。跡片づけをしなくてすむから、こんな省エネはほかにない。しかしそういう農家にも老父・老母一といつても六十歳そこそこだろうーがいるはずである。六十すぎの年寄りともなれば、沢庵に味噌汁に暖かい米の飯が理想的な朝飯だったし、今でもそれが食べたいだろう。が、若い夫妻は、『おまえは、仕事せんで、腹は減らんずら。朝飯はいらんのう』と一方的に宣言してさっさと家を出てゆく。若い夫妻は、喫茶店で二人合わせて五百円のモーニング・サービスで朝食をすますつもりなのである。年寄り夫婦は、昨夜残りの冷や飯を御茶漬でかっこむのがせいぜいだろう。」





『農の情景一菊とメロンの岬から一』(昭和 63 年(1988)刊)より引用する。

「雨とダム」より。

「いま愛知県三河山間にある設楽町では十年近く全町一致で反対していたはずの設楽ダム建設に突然町会が賛成したため、ダムの湖底に沈むことになる約八十五戸は大きな不安と不信とに陥っている。

この設楽ダム建設はかなり前から計画されていたが、一昨年(1893年)秋から昨年春にかけて三河地方に数か月間ほとんど雨が降らなかったため、豊川用水の水がめたる同じ北三河地方の宇連ダムが貯水量ゼロつまり底まで干上がってしまった。豊川用水は、日本で最も豊かな農村といわれる渥美・赤羽根・田原三町(当時)と豊橋市の^{そさい}蔬菜や花の栽培を潤す農業用水であるだけではなく、最近田原に進出したトヨタ自工をはじめ大企業にも必要だし、東三河地方全体の飲用水道もこの用水に依存している。だから宇連ダムの干上がりは、もう一つの水がめの必要を痛感させて、東三河の市町村が設楽ダム建設の促進に熱心に力を入れても不思議ではない。この六月にも渥美三町の助役が揃って渥美特産のメロンを手土産に設楽町役場に設楽ダム促進の懇請に赴いたばかりである。豊川用水がなくてはせっかく誘致した大企業も渥美の近代化農業の繁栄も崩壊してしまうかもしれないから、ダムが多ければ多いほど、用水下流の住民には好都合だろう。

ところが、豊橋市にも渥美半島にも雨は降るし、しばしば豪雨から崖崩れや氾濫さえないではない。とくに最近は数千棟数万棟の温室とハウスが建ち並んでいるが、この施設園芸は天から降り注ぐ雨を受け入れない。雨水に打たれると温室育ちの作物が病気になるやすいからである。(中略)。

地元以降る天の恵みである雨水をしばしば氾濫させながらほとんどみんな海に流しておいて、もっぱら百数十キロ隔たった谷間の水で生活し営農しているのが現状だ。少なくともこの半島に降る雨水を何とか利用しようとする努力をほとんど見たことがない。八十五戸の人々を住みなれた谷間から追い出して新しいダムを造る方が下流の住民にとって簡便かつ経済的なのであろうが、どうも納得がゆかぬ。」

「電照菊」より。

「冬取りキャベツと並ぶ渥美農家の収入の源泉は電照菊であ



電照菊ハウス (渥美半島の代表的施設園芸、田原市渡会憲市氏所有)

ろう。沖縄・台湾電照菊の急激な進出に恐れをなして温室トマト(冬じゅう果物店などを飾る先端がちょっととがった大型のファースト・トマト)に転向する温室やハウスも少なくないけれど、やはり過半数が菊作りに落ち着くらしい。それにこの冬のキャベツ大暴落で露地農業の前途に見切りをつけて、この春以来至るところに九百坪前後の連棟温室、大型ハウスの新設ブーム。今なお新設が続いているが、その作物はほとんどみんな電照菊と見られている。(中略)。

電照菊の花を切り出すまでにどんなに手間と世話がかかるものか。まず花の切り出しが終わる三月から四月に温室内の古株数百株を根ごと掘り起こして、たっぷり肥を施した露地畑に植えこむ。そしてせっせと追肥をやる。六月、七月にたくたくましい芽が伸びてくるとそれを切って、一定の数がそろうまで冷蔵庫で保存するか、たくさんの芽が出れば即座に、堆肥などをずっしりやってふわふわする畑にもワラ切れを敷いた間にずらりと挿し木をする。夏の挿し木だから、黒い寒冷紗^{かんれいしや}で太陽の直射を遮るだけでなく、朝夕灌水を怠るわけにはゆかぬ。だから苗床はたいいて家の近くにある。

八月ともなれば、根付いた挿し木からやはりたくたくましい新芽が幾本も伸びて来る。

それを摘みとって発根液に浸けたうえ、別の苗床に改めて挿し木する。この農業のお陰で発根率がとても上がったようだ。

この苗に十分根が出て移植が可能になるのは八月末から九

第13回 「打ち続く干ばつ、豊川総合用水事業、そして大島・^{したら}設楽両ダム始動」

月になる。そこで初めて温室なりフレームなりに本移植し、同時に夜は電灯をともすのである。

わたしの驚嘆するのは、この移植の回数ではなく、実は施設内に植えられる菊の苗の数の方である。一本の苗から二本の花を収穫するためには百坪あたり八千本が今の基準だが、花の大

きさと美しさを増すために一本の苗に一つの花という方向に傾いているから、そうなると一万六千本の苗がいる。七百五十坪の温室には、二本取りで六万本。一本取りなら十一万本の苗を一家二人か三人で作り、かつ植え付けねばならぬ。だがこれは菊作りとして苦勞の序の口にすぎない」

<付録 2 >

豊川用水の経緯

昭和 2年 4月	農林省「大規模農業水利調査」計画採択	昭和61～63年	水資源開発公団造成施設機能調査（豊川用水地区）
昭和24年 9月	国営豊川農業水利事業所開設、宇連ダムの建設工事に着手、当初計画 受益面積 10,469ha 総事業費18億円	昭和62～63年	同時に厚生省の水資源開発計画調査（昭和62～63年）
昭和26年12月	国土総合開発法に基づく「天竜東三河特定地域」の指定	平成元年 4月	豊川用水改築事業推進連絡協議会発足
昭和29年 4月	第1次計画変更 受益面積 12,474ha 総事業費86億円	5月	豊川用水施設緊急改築事業新規採択
昭和33年 3月	佐久間ダムからの分水協定の妥協		農水省による豊川用水第二事業の地区調査（～平成15年度）採択
	第2次計画変更 受益面積 21,330ha、水道用水、工業用水の追加 総事業費173億円	平成 2年 2月	豊川水系が水資源開発水系に指定
12月	宇連ダム完成、大野頭首工及び大野導水路の建設工事に着手	5月	豊川水系における水資源開発基本計画の閣議決定
昭和36年 7月	大野頭首工及び大野導水路完成	9月	豊川用水総合管理所を豊川用水総合事業所に改組
9月	愛知用水公団法の一部改正、国営及び県営事業を愛知用水公団が事業承継		豊川用水施設緊急改築事業に関する事業実施計画の認可、緊急改築工事に着手
	事業実施計画 受益面積 21,884ha、水道用水、工業用水	平成 5年11月	豊川用水施設緊急改築事業に関する事業実施計画変更の認可、支線水路改築工事に着手
昭和38年 6月	東部幹線地域部分通水	平成 6年 4月	農水省による豊川用水第二期事業の全体実施計画（～平成10年度）
10月	牟呂松原頭首工の建設工事に着手	平成 9年 3月	緊急改築事業のうち当初計画分を完了
昭和42年12月	事業実施計画変更 受益面積 20,182.5ha、水道用水、工業用水、総事業費488億円	平成11年 3月	緊急改築事業の全ての事業が完了
昭和43年 4月	豊川用水管理事業所発足（昭和45年豊川用水総合管理所に改称）	4月	豊川水系における水資源開発基本計画の一部変更
	5月 豊川用水完成（完工式）、豊川用水施設管理規程決定	5月	豊川総合用水事業に関する事業実施計画の認可
	6月 全面通水開始	6月	水資源開発公団が豊川総合用水事業を国（農水省）愛知県より事業承継
10月	愛知用水公団が水資源開発公団に統合	12月	豊川用水二期事業に関する事業実施計画の認可
昭和47年 4月	農林省による豊川総合用水事業の直轄調査（～昭和51年度）		豊川用水二期事業に着手
昭和51年11月	豊川総合用水事業推進連絡協議会発足	平成13年 4月	豊川用水総合事業所を豊川用水総合事業部に改組
昭和52～54年	農林省による豊川総合用水事業の全体実施設計	平成14年 3月	豊川総合用水事業が完了
昭和55年10月	豊川総合用水農業水利事業所（国営）発足		豊川用水施設等に関する施設管理規程の認可
昭和56年 5月	豊川総合用水事業促進協議会に改称	4月	豊川用水二期事業促進協議会に改称
昭和59年 2月	西部幹線水路長山サイホンで漏水事故発生	平成15年10月	独立行政法人水資源機構設立
昭和61年 4月	水資源開発公団造成施設機能調査「豊川用水地区」新規採択	平成18年 2月	豊川水系における水資源開発基本計画の全部変更
昭和61年10月	豊川用水施設機能調査推進連絡会発足	7月	豊川用水通水100億トン
		平成20年 1月	豊川用水二期事業に関する事業実施計画変更（大規模地震対策、石綿管除去対策の追加）の認可
		6月	豊川水系における水資源開発基本計画の一部変更

（連載、了）

2011年4月号より連載を開始しました「新・種を蒔く人<私説>世紀の大プロジェクト～豊川用水～」は、今月号で最終回となりました。連載にあたりご協力をいただきました関係者の皆様、ご意見ご感想をお寄せいただきました読者の皆様に、厚くお礼申し上げます。（編集部）

豊川用水 ^{ほうらい} 鳳来の峯より90キロ流れ ^{いらごさき} 伊良湖岬へ
 ～ 渥美半島 ^{よくや} 一大沃野に ^{よみがえ} 蘇る ～



鳳来寺(新城(しんしろ)市)

703年、利修仙人が開山した真言宗の古刹(こさつ)。鎌倉時代に源頼朝によって再興されたと伝えられる。徳川家康の父松平広忠が婦人於大(おだい)の方と本尊峯葉師如来を祈願し、家康を授かったことに感銘した三代将軍家光が、東照宮(写真右上)建築を命じて四代将軍綱吉が完成させている。(日光、久能山に次ぐ東照宮)参道には、松尾芭蕉など多くの文人が訪れ、俳句・短歌を残している。

グ ラ ビ ア
 とよがわようすい
 豊川用水
 toyogawa Canal



鳳来山東照宮



昭和5年の開墾計画図

初期の豊川用水(赤色ルート)と開墾計画。昭和33年佐久間ダムからの分水協定が静岡県と愛知県との間で締結され、農業用水に加えて上水、工業用水が増量されたことにより、宇連(うれ)ダム並びに幹線水路が当初の計画から嵩上げ(10m)されることになった(青色ルート、現在)。これに伴って西部幹線が、蒲郡市まで追加されている。



渥美半島のキャベツ畑(中山地区)

キャベツの生産日本一を誇る田原市。生育に適した気候が通年の出荷を可能にし、有機肥料による作柄は、その食感が好評を博している。各々の畑には、豊川用水(鳳来からの水)がスプリンクラーから散水される。



伊良湖岬

島崎藤村「ヤシの実」の唄で知られる恋路ヶ浜と、三島由紀夫の「潮騒」の舞台となった「神島」(中央左)。また、「鷹ひとつ見つけて嬉しい伊良湖岬」の芭蕉の句碑も見られるロマンの岬である。9月中頃から南西(尾鷲方面)に向かう渡り鳥がみられる